



ドーム内では、まさにそのことが起こったのでした。立場が変わればみな、極限状況に置かれると残酷、自分中心、利己的になり得る人間の罪の姿が映し出されたのでした。

今日すでに、自分が生き残ることが優先、重要課題で、人々がますます自分中心に生きることに拍車がかかっている時代、追い討ちをかけるように、偽預言者、偽教師等だます者たちや不法がはびこり、愛が失われるようになっていくと、恐ろしい終末の眺望を主は語られたのですが、マタイ、マルコ、各福音書では、このような世の状態を「産みの苦しみ」と表現しています。イエスは、この世（人間の諸王国、その背後の支配者は悪魔）がキリスト支配の世（神の国）に改まるためにこの世が通らなければならない唯一の道を「産みの苦しみ」と呼ばれたのです。産みの苦しみによって産み出されるのは、キリストの再臨（キリストが全地を支配されるため全諸国の王として、甦りの体で再び地上に来られること）によって始まる地上に実現する「神の国」です。したがって、そこに入る人々は「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」（ヨハネ3：3）とイエスが言われたように、キリストにあって生まれ変わった者たち、すなわち、信仰により新生体験をした者たちのことです。イエス・キリストが二千年前地上に降誕されたことによって、目に見えない形で信じる者たちの間に始まった神の国が、だれの目にも明らかなキリスト支配の時代として実現するには、地も人もともに生まれ変わる必要があるのです。旧約の時代、罪に汚れたものが根絶されることによって聖められ、神の所有物、所有地となった（この過程を聖書では「聖絶」という）ように、神の義、愛、平安が支配する新しい治世は、神の厳しい裁きの後初めて実現するのです。

イエスは産みの苦しみを次のように特徴づけられました。（1）多くの偽キリストの出現と惑わし—自らをメシアと名乗る人物は、西暦二世紀に第二次ユダヤ人の乱を先導したバー・コクバ（星の子）として知られたユダヤ人シモン他、二千年の間にすでに多くが出現。バー・コクバのメシア宣言は、当時最も崇敬されていたユダヤ人学者でラビ（ユダヤ教教師）のアキバが民数記のバラムの預言を裏づけ聖句として支持したことにより、多くのユダヤ人を惑わすことになった（2）「民族は民族に」敵対する民族紛争—今日至るところで勃発して、收拾のつかない民族間の争い、市民戦争、骨肉の争いは二千年間耐えたことがない。六百万～七百万にも上るヨーロッパ系ユダヤ人が虐殺された二十世紀の『ホロコースト（ショアー）』は、最悪の悲劇であった（3）「国は国に敵対して立ち上が（る）」政治国家間の戦争—二十世紀の前半の二つの世界大戦に象徴される国家間の流血惨事は（2）と同様、二千年間耐えたことがない（4）飢饉、疫病、地震に象徴される天災—これら天災の頻度、強度はともに最近、とみに増加の傾向にあることが指摘されている

冒頭に引用したように、（1）から（4）が「産みの苦しみの初め」のしるしであれば、そこから派生する副次的な問題は（5）～（7）であると、主は言われます。すなわち、（5）殉死—キリストの名のゆえに迫害され、捕えられ、死に追いやられ、すべての国の人々に憎まれる。（6）背信—多くの者が信仰から離れ、キリストに不従順になるだけでなく、互いに裏切り、憎み合うようになる。（7）世界的退廃、大混乱—非常に影響力の強い—見カリスマ的指導者、しかしその正体は偽預言者なる人物が出現し、多くの者を惑わす一方、人々は自己中心に生き延びる方策に奔走し、神の掟は忘れ去られ、不法がはびこり、愛が冷える。ここで用いられている愛はアガペーの愛で、クリスチャンの愛に用いられている用語であることから、クリスチャンを含め世の中が如何に愛に欠落、飢え乾く時代になるかが暗示されている

（5）～（7）の兆しも昨今すでに世界的に増加の一途にあり、「産みの苦しみ」は着実に進んでいるのです。

しかしイエスはこれらのしるしを語られた後、その先に希望があることを「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます」と励ましの一言で示されました。しかもそのような試練のときにこそ、「御国の福音」が全世界に宣べ伝えられるのであると言われたのです。ここで用いられているギリシヤ語時制は正確には、「耐え忍んだ者は救われます」で、言い換えれば、キリストを受け入れて告白した者は今すでに救われているのですが、救われた状態を最後まで保ち続けなければならないので、またそれには困難が伴うので、耐え忍ぶ必要があるということが示唆されているのです。マルコは、「こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません」（13：10、下線付加）と明記して、迫害の中で証しの機会が与えられること、福音伝道に多大な犠牲が伴うことを明らかにしています。このように、一連の産みの苦しみのしるしを告げた後、マタイとマルコの両福音書はさらに、（5）～（7）に象徴されている独裁者（偽預言者が信奉し、崇拜の対象としてでっち上げる反キリスト）による迫害、苦難、惑わしの日の詳細を引き続き記し、『「荒らす憎むべき者」が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）』と、しるしを見過ぎさないよう注意を喚起しています。この点、ルカの福音書が産みの苦しみの初めのしるしの前に起こる苦難の出来事として、エルサレム包囲を特記しているのは対照を成しています。ルカの福音書で「その日．．．この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです」（ルカ21：23、下線付加）とイエスが具体的に預言されたエルサレム包囲の出来事は、なるほど66～70CEに文字通り成就したのでした。しかし、ルカも含め共観福音書はすべて、終末の時代の最後を画するしるし（「産みの苦しみ」が終わり、主の再臨が間近であることのしるし）として、まずイスラエルに起こる出来事に注意するよう『いちじくのたとえ』で喚起し、イエスが前もって語られたこれらのことが全部起こり人間の諸王国の時代が終わると、ついに神の支配が全地に及ぶ新生の時代が到来すると語っているのです。今日、大患難、苦難の日はユダヤ人と異邦人には臨むがクリスチャンには臨まないという『患難期前携挙』という楽観的見解が『千年期前再臨説』（昇天されて父の右の座に座しておられるイエス・キリストが再び地上に戻って来られた後、千年間の神の国が地上に始まるという終末論解釈）支持者の圧倒的多数によって支持されています。確かに「神の激しい怒り」の裁きはクリスチャンには下らないこと、災いから逃れることができることが約束されていますが、耐え忍ばなければならないような苦難や苦難のときがクリスチャンにも臨むというのが聖書の一貫した主張のようです。「その日は、全地

の表に住むすべての人に臨む「気をつけていなさい。目をさまし、注意していなさい。」「すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。」「いつも油断せずに祈っていなさい」等々のクリスチャンに向けてのイエスの警告は、このことを裏付けています。また、ヨハネの福音書に記されている十一弟子に向けられたイエスの最後の晩餐のときのメッセージの中の父への祈りの言葉「彼ら（父なる神が世から取り出してイエスに下さった人々）をこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします。．．．わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。」は、あくまでも全時代のクリスチャンが証し人として最後までこの世の悪に対抗していくことを前提としたもので、だからこそ、主の守り、支えが信仰生活には不可欠なのです。